



こんにちは、ヘルパーステーション カルムです。

前回の「認知症について」の続きになります。

- 生きていれば将来誰でも認知症になる。
- 認知症という病気のために自らの意思とは関係なく記憶が消えてしまい、目の前で起こっていることやそのとき感じたことが本人にとっては初めてのことになる。
- 介護する側は認知症の方の感情的になっている姿に囚われ問題行動と捉えてしまいがちだが、大事なのは感情的になってしまう根本にある理由に気づけるかどうか。
- 本人に根付いている想いに沿った介護を行う上で、本人の性格やこれまでの生活歴を知ることが重要。ということが前回の要点でした。

さて、介護業界では「気づきが大切」とよく言われています。普段との違いを察知できる感覚は認知症ケアを行う上でも必要になります。癖や習慣を把握し普段と違う様子があれば本人からのサインであり、支援すべき時なのかもしれません。そうしたきっかけに繋がる要素が「気づき」になります。

気づきが大切なのは認知症ケアに限ったことでなく、私たちが生活していく中でも家族、恋人、勤め先や同僚、それらを取り巻く環境に配慮し対応していかなければ失うものが出てきます。

認知症を患うと記憶力低下の他に自身を取り巻く環境に対応する力も失っていき、社会性が乏しくなる場合も少なくありません。

- 帰ってこられなくなった経験から外出を控えるようになった。
- 失禁するようになり茶飲み友達と会わなくなった。
- 趣味の行程がわからなくなり仲間との集まりに行かなくなった。
- 顔は覚えているが名前が出てこないことが増え家にこもるようになった。等々

他人に話し辛い理由も多く自らの意思に反して行動範囲が制限されていき、失望感や孤独感、やがては感情、意欲の低下を招くことになります。

そういった「本人を取り巻く多面的な状況」を本人、家族からの情報は勿論、様々な業種からなる「多角的な分析、評価」を行うことで支援すべき内容は見えてきます。

認知症ケアって深いんだなぁと認知症実務者研修を受けて感じました。今回はここまで致します。次回も引き続き認知症について書いていこうと思います。

次回のキーワード：本人に根付いている想い、QOL